

タイトル「東京の謎(ミステリー)」～この街をつくった先駆者たち～ (全256ページ)

出版社 : 文藝春秋

2020年9月17日:第1刷発行



著者:門井慶喜氏:1971年群馬県生まれ。同志社大学文学部卒業。2003年『キッドナツパース』でオール讀物推理小説新人賞を受賞しデビュー。2016年『マジカル・ヒストリー・ツアー ミステリと美術で読む近代』で日本推理作家協会賞(評論その他の部門)、2018年『銀河鉄道の父』で直木賞受賞。他の著書に『家康、江戸を建てる』『東京、はじまる』など、近著に『地中の星』がある。

概要:江戸・東京に深い造詣をみせる著者が、東京の21の地域について過去と現在とを結び、東京の「謎」を解き明かす。回ごとに東京と町を築き上げてきた巨人たちとの交差が描き出されます。

本書コンテンツ

—はじめに なぜ東京を「とうきょう」と読んではいけないのか—

- ・ 呉音と漢音が一語の中で混ざると、私たちの心の耳は、かすかな不協和音を聞く。東・トウ(漢音)、京・きょう(呉音)は、当時の江戸も含め一般民衆には京・ケイ(漢音)が少しきつく感じたため、京・きょうに落ち着いたのであろう。京・ケイ(漢音)は、京王線、京成線、京浜急行線などに見られる。

—第一章 東京以前—

第一回 なぜ源頼朝は橋のない隅田川を渡ったのか

- ・ 当時の西日本には高度な水上技術(例・瀬戸内海の水運、安芸の国の厳島神社)があったが、隅田川は田舎の大河であり恒久的な橋梁もなく、頼朝は不安定な「船橋」により隅田川を渡った。
- ・ 家康は、洪水防止と水運網の整備のため、利根川・東遷と荒川の・西遷を行い、荒川を都市の河川に仕立てた。

第二回 なぜ大久保長安は青梅の山を掘ったのか

- ・ 江戸開闢以来、大名屋敷や旗本屋敷などの堀に使われ急増した漆喰の需要に応えるべく、幕府は近世最高の鉱山経営者の大久保長安に、青梅石灰の採取、江戸への運搬の算段を命じた。
- ・ 青梅は遠方であり(東京駅から50キロ以上)、大久保は漆喰の運搬のために「青梅道」を作った。江戸市の中に入る前の宿駅として内藤新宿を設けた。この青梅道は、発展的解消して現在の青梅街道となっている。

第三回 なぜ麴町は地図の聖地になったのか

- ・ 地図は本来軍事機密であったが、平和な徳川時代が続き、日常の道具としての地図の有用性が再認識された。
- ・ 「近江屋」「金麟堂」と麴町には切絵図の二大版元が出揃った。江戸城の弱点は西側で、そこに番町(兵営・武家)と麴町(その補給基地・商家)が位置し、平和な軍事都市である麴町で地図を買うのが、納まりが良かった。

第四回 なぜ浅草は東京の奈良なのか

- ・ 東京では極めて例外的な古さである浅草の起源は、西暦628年と言われている。徳川時代の浅草は、聖俗1対1で、境内の賑わいは圧倒的であった。浅草寺は、明治初期の廃仏毀釈からも復活し、その強さの原因は、東京の中の奈良というべき起源の古さにあるのだろう。浅草はまことに東京の奈良にほかならなかった。

第五回 なぜ勝海舟はあっさり江戸城を明け渡したのか

- ・ 江戸城のあっさりとの明け渡しは、守るべき旗本の想像力不足が主因ではないか。彼らは、江戸開城を大したものとは思わなかったのかもしれない。そもそも徳川時代は「無血開城」の連続だった(例・赤穂城の明け渡し)
- ・ 事態の重さを理解した幕臣たちは、江戸城・無血開城後に上野・彰義隊、北越戦争、会津戦争、箱根戦争と大規模戦闘を続発させたが、旧幕側の全敗という結果に終わった。彼等の無意識のずるずる感の結果であろうか。

—第二章 東京誕生(明治以後)—

第六回 なぜ銀座は一時ベッドタウンになったか

- ・ この街の発展ははじめから約束されていたわけではなく、むしろ日本橋と新橋にはさまれた中途半端な立地であった。政府は、東にある築地の外国人居留地を意識し、煉瓦街の日本初のベッドタウンを造ったが、失敗に。
- ・ 銀座の名前の由来は銀貨の鑄造所があった為であるが、明治の始まりと共に通貨の鑄造所は大阪に移され、銀座の役割は終わってしまった。

第七回 なぜ三菱・岩崎弥太郎は巢鴨を買ったのか

- ・ 趣味を持たなかった弥太郎だが、庭園だけは好んだ。最初に現在の清澄庭園(深川)と現在の六義園(当時は巢鴨エリア、現在は本駒込)を購入し、続いて巢鴨エリアの各大名の中・下屋敷を購入した。あまり明確な目的は無かったようで、「いずれ巢鴨から板橋まで買い上げ、国家の役に立つ仕事をやってみせよう」と言っていた。

八回 なぜ早矢仕有的(はやしゆうてき)は丸善を日本橋にひらいたのか

- ・ 丸善の創業者の早矢仕有的は、もともと医者だったが、福沢諭吉に勧められ、明治2年に横浜で輸入商「丸屋」を開業。その十年後に日本橋支店を。それを本店にしてしまった。横浜の洋書を日本橋で売る、新来(横浜)と旧来(日本橋)のダブルイメージの勝利なのである。早矢仕の一貫した合理的精神の賜と言える。
- ・ ハヤシライスは、明治初期、この早矢仕有的の創作という説もある。

第九回 なぜエビスビールは目黒だったのか

- ・ 三代将軍家光は、江戸城南西の郊外・目黒の地に「庶民信仰の地を作ろう」程度の意図であったのでは。
- ・ この人気のあった落下傘観光地には、後に火薬庫、競馬場(後に府中に)、そしてビールの巨大な製造工場も造られた(後に恵比寿ガーデンプレイスに)。江戸・東京の中心地から中途半端な距離で、そして人が来やすい目黒には、こういう便利屋になることが唯一生き残る道だった。

第十回 なぜ「東京駅」は大正時代まで反対されたか

- ・ 東京駅は大正三年(1914)に開業されたがギリギリまで駅名が決まらなかったのは、大阪や京都と違って、「東京」という地名に慣れていなかったから。「東京」という名は、田舎から来た志士上がりの連中がどさくさに紛れて押し付けたものに過ぎない。因みに、ロンドン駅もニューヨーク駅も無い。

第十一回 なぜ野間清治は講談社を音羽に移したのか

- ・ 講談社の創業者の野間清治は、最初に、東大教授を含む錚々たる顔ぶれによる演説会の演説等の雑誌を出し、継続して成功し、それを発展させたのが「講談倶楽部」。講談倶楽部には紆余曲折はあったが、最終的な成功には、浪花節の掲載継続、文筆家による直接文章作成(速記者を介さずに)がある。
- ・ 野間の会社は成功し、新社屋を本郷から東京の辺境の地の「音羽」に引っ越した。野間には、エリートより大衆へ、高級なものより卑近なものへの衝動があり、なるべく本郷(帝大)から遠ざかりたかったのではないか。

—第三章 関東大震災—

第十二回 なぜ後藤新平は震災復興に失敗したのか

- ・ 後藤は医師であったが、台湾総督府の民生局長、南満州鉄道会社初代総裁、東京放送局総裁(NHKの母体の一つ)等の成功を経て、関東大震災後の「地震内閣」に入閣。後藤は大きな東京復興の計画を打ち出したが、大正時代の政府には強制執行は進められず、結局ある程度の成功に留まった。後藤の主観では「失敗だった」と。

第十三回 なぜ日比谷は一等地の便利屋なのか

- ・ 日比谷は、歴史的格式の点では皇居前でありながら大手門から少し離れているし、近くには丸の内、銀座があり、一等地としては中途半端な位置にある。日比谷は、一等地の便利屋、国家の〃、正装の〃と言えるだろう。
- ・ 現在の日比谷は、個々の建物や施設は個性的である:帝国劇場、第一生命、日比谷公園、帝国ホテル。

第十四回 なぜ新宿に紀伊國屋書店があるのか

- ・ 甲州街道の最初の宿場は当初下高井戸にあり、日本橋から約四里(16km)あり、下高井戸の前に新宿の要望が強く、内藤新宿が設けられた。その宿には、甲州街道沿いの山梨県、長野県からの薪炭の間屋が多かった。
- ・ 関東大震災により東京の人口の西進が進み新宿にも人が集まり、新宿の薪炭問屋の一軒が紀伊國屋書店を創業。日本橋の丸善が相手とした知的エリートよりも少し広い・庶民的な知的公衆ぐらいが相手の商売で成功した。

第十五回 なぜ五島慶太は別荘地・渋谷に目をつけたのか

- ・ 渋谷は低地と武蔵野台地の丁度境目にあり、江戸時代よりの日本初の別荘地であった。そこを商都化、新宿化したのが五島であった。五島は、紆余曲折はあったものの関東大震災後の郊外への移転による人口増で、経営していた目黒鎌田電鉄で大儲けし、その収益を使いやはり経営していた東京横浜電鉄の渋谷・横浜間を開業させた。
- ・ 東側の終点は新宿を目指したいところであったが、結局、渋谷に落ち着いた。五島は人生に出遅れていたが、渋谷も新宿に比べると発展が出遅れており、自分と重ね合わせたのではないか。
- ・ 五島は、その後、現在のメトロ銀座線を確保し、渋谷をその結節点とし、現在の渋谷の繁栄の基礎を築いた。

第十六回 なぜ堤康次郎は西武池袋線を買ったのか

- ・ にっこ三兄弟(山手線西半分に点在)の新宿／渋谷／池袋のうち、池袋だけが戦後の発展と出遅れた。
- ・ 山手線外への起点作りとしては、池袋の場合は西武鉄道、創業者の堤安二郎が、その任を担った。堤は多くの失敗もしたがそれを癒せるだけの人脈(情報)を持っていた。そこから武蔵野鉄道の経営に加わり、経営を持ち直させ、更に昭和29年(1954)の丸ノ内線の開業もあり、以降、人口が急増し、新宿、渋谷に続いた。

第十七回 なぜ羽田には空港があるのか

- ・ 羽田の地名は少なくとも戦国期から存在し、地名の語源はつぶの細かい粘土を「ハニ」と呼んでいてそれを産するところからではないか。羽田の歴史は、1、徳川初期にのりの養殖が始まり、2、徳川後期に新田開発で陸地が広がり、3、明治期に観光地化し、4、昭和6年に飛行場が完成した。羽田は「都会の田舎」であった、都会の「時間の速さ」・「空間の少なさ」の両方の答えを満たしてくれる土地であったので、空港が開設された。

—第四章 戦後—

第十八回 なぜトットちゃんには自由が丘がぴったりだったか

- ・ トットちゃんは問題児であったので退学になり、東急大井町線の「自由が丘」駅の私立「トモエ学園」の小林宗作校長により、救われた。「子供への信頼」がベースの教育で、トットちゃんにはぴったりの学校であった。
- ・ トモエ学園の前身の「自由ヶ丘学園」の創始者は手塚岸衛であったが経営難に陥り、小林が新たに経営に乗り出した。昭和4年(1929)に最寄り駅名が自由ヶ丘に変わり、自由ヶ丘の名前が東京中に知れ渡った。
- ・ 日本語の「自由」という語が泥臭さから小林的なスマートさに変わり、現在の女子受けするおしゃれな街へと。

十九回 なぜ寅さんは葛飾柴又に帰って来たのか

- ・ 「男はつらいよ」は、戦後で最も成功した大衆映画である。山田洋次が寅次郎の帰り先として葛飾柴又を選んだのは大成功であった。東京の人の目には地方じみて見え、地方の人の目には東京らしく見えるという絶妙の距離感が東京、地方それぞれの観客たちの複雑な自尊心に傷をつけることをしなかった。
- ・ そして葛飾もまた、土地柄そのものが微温的なのである。或いは、寅さんの的であるとも。都会でもなく、郊外でもなく、地方の中心都市でもない、番外地的な土地なのだ。

第二十回 なぜピカチュウは町田で生まれたのか

- ・ ポケットモンスターを創り出した田尻智は、他の江戸・東京の中西部の町と違ってずっと「ただの農村」であり続け、ようやく開発の手が伸ばし始めた昭和30年代の直後に町田で生まれ、田尻少年は町田という街の無限性によって、たぶんその鍵をゲットしていた。そこには東京も神奈川もないかわり、無限の「世界」があった。

第二十一回 なぜ代々木の新国立競技場は案外おとなしいのか

- ・ お金がかかり過ぎるとの理由でザハ案がキャンセルされ、新国立競技場は費用の節約・後期の短期化ゆえではなく、もっと精神的、積極的な姿勢において前衛より伝統を選んだ事になる。明治神宮の「杜のスタジアム」に。

—むすび なぜ江戸は首都になったのか—

- ・ 著者(門井慶喜)は「江戸時代」の呼び方に少し違和感があった。大阪はいわゆる天下の台所、江戸は単なる大消費地にすぎない。大阪はこの時代、半首都ぐらいの位置付けであったので、維新の時には大久保利通がいつか、「新しい帝都は、大阪にしよう」と訴えたりもした。
- ・ 徳川時代の「上方」は大阪を中心にした「多極分権型」、関東平野は「東京の一極集中型」。一刻も早く中央集権の実を手に入れたいと思う新政府にとって、江戸＝東京は、実に落ち着いたいい場所だったのである。

- ・ 東京が首都の座をどこかに奪われることがあるとしたら、その原因は土木にあるかも知れない。しかし、土木までもが仮想化されている。すると世界の首都も人間の頭の中にしか存在しない時代が来るかもしれない。

以上